
魔法使いサスケと 空をおよぐ金魚

まごひげ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いサスケと

空をおよぐ金魚

【Nコード】

N1582E

【作者名】

まごひげ

【あらすじ】

サスケは魔界のどの魔法使いとも違った不思議な魔法使いだった。そのせいで実験材料にされ、身体を蝕まれてしまっていた。実験室に乗り込んだ麻美らはサスケを助けようとするのだが……

新たな展開

「入学か・・・なんか複雑・・・」

少女は、入学プリントをビスケットを食べながらまじまじと見つめていた。

少女の名前は吉田 麻美、今日の深夜12時に魔法界にある学校に入学することになっている。

「あと、30分、」

壁にかかっている時計をプリントと照らし合わせた。

ジョイス魔学学校、、

「緊張する、」

一言呟くとイスを鳴らした。

コンコン・・・

「入ってもいい？」

明るく弾んだ女性の声が鳴った。

「うんいいよママ」

ガチャリとドアノブが半回転すると黒いワンピースにひときわ目立つパールのネックレス

と緑のイヤリングをした女性が立っていた。

「麻美、支度は出来た？」

「うん」

紺色のブレザーにパリっとしわの伸びたカッターシャツ赤いリボンとスカートはジョイス魔学学校の制服だ。

「どう？」

「制服でしょ？よく似合っているわよ」

「そう？ありがとうママ」

麻美は、はにかんで顔を赤らめた。

「麻美そろそろ」

「あっほんと！行かなくちゃ」

午後11：50分

「でっでも私学校までどうやって行くか知らないよ？」

「大丈夫よ案内してくれる子が来てくれているから」

「えっ？」

麻美は魔界に今日、初めて訪れる。

もちろん麻美に魔界^{そっち}に知り合いはいない。

「それと、、」

マリ（麻美の母）は右手の一指し指をヒョイと動かすと瞬間的に左手に赤い水筒が出てきた。

「これを持って行ってちょうだい」

「何が入っているの？」

「何も入っていないわ、空っぽよ」

「??」

不思議に思った。

基本的に水筒って何らかの飲み物を入れる道具のはず、、
なのに何にも入っていないだなんて、、

しかもあの水筒は私のじゃない、、ママのだ、、
飲み物を入れる目的じゃない、他の目的があるのか？

そうこうしている間にマリは麻美のバッグに水筒を詰め込んだ

「よろしくね」

マリは超越者とも呼ばれる魔術師だった。

魔術師の子供ということだけあって麻美はマリの後継者になるべく
この魔学を学べる学校に
入学することになったのだった。

人間界とは別の世界に、、

「ママ、案内してくれる子って誰なの？」

「向こうの子よ」

「魔界の？」

「そうよ、でも大丈夫ママがちゃんと頼んでおいたから、ママは今日実験があるから入学式には出られないけど、、」

「うん」

11：55分

「ささっ時間よ行きなさい」

「うん行つてきます」

麻美は真新しい革靴をはくとドアノブに手をやった。
ガチャリと回すと月明かりがキラリと差し込んだ。

「いい旅立ち日和ね、満月だわ」

「じゃ行つてきます」

家の外へ飛び出すと自然に扉の閉まる音を聞いてから歩き始めた。

バッグを肩にかけて道路に出ると見慣れない少年が家の塀にもたれていた。

「やっと出てきた、」
フワリと夜風が吹いた。

乱れた髪を手で直しながら少年を見た。

乱れてもそのままのくしゃくしゃのキャラメル色の髪

艶やかな赤い目は季節はずれの真っ黒のコートのおかげで目立った。
背中には身の丈ほどある布の包みを背負っていた。

「じゃ僕の後ついてきて」

少年は麻美の前をゆっくり歩き始めた。

それに習うかのように麻美もその後について行く

「君が案内人？」

「そう」

「名前は？」

「S A S K E / 1 5 0 0」

「それ名前？」

「一応」

「ふーん」

「でも長いからサスケでいいよ」

「サスケ、分かった」

麻美より背の高いサスケは歩幅も大きいので麻美は小走りになっていた。

しばらく歩くとサスケは唐突に立ち止まった。

「……」

「魔界の入り口ここ？」

「そう」

見渡す限り住宅地で自分たちの立っているところはそのど真ん中なのだった。

「どこから入るの？なんにもないじゃん」

そんな麻美を横目にサスケは黙々と作業を進めていた。

内ポケットから使いかけのチョークを取り出した。

「チョーク？」

麻美が言っても知らん顔をして足元にあるマンホールに何かを書き始めた。

かなりいりくんだ模様がどんどん出来ていく。

チョークを持った手を止めることなくサラサラとサスケは書き進めて行った。

「よし、出来た」

全体を見ると出来上がったその絵は怪獣の形として見て取れた。満足そうにサスケはニタリと笑うと右手をマンホールにポンと乗せ

た。

目を閉じるとマンホールからまばゆい光が輝き始めた。

現在時刻12時

当然深夜なので辺りは暗い

「よし」

サスケは閉じた目をうつすら開きマンホールの上から手を引いた。
同時に光は吸い込まれるように消えた

「入って」

サスケはマンホールのふたを取って麻美に中に入るよう促した。

すると向こうのほうから声が聞こえてきた。

「麻美〜〜!!」

「ママ!!」

左手に何かを持っている。

「どうしたの?ママ」

ハアハア、、、息を切らしながらマリは麻美たちに追いついた。

「ハアハア、、麻美!忘れ物よはい学生証」

「あああつつ!!ほんとだ!!ありがとうママ」

「いいのよ、それよりうまく案内してもらってる?」

「うん!とってもいい人なんだよ」

「よかったわね」

「うんサスケくんって言うの、、」

サスケを見るとサスケはブルブルふるえていた。
固まって動こうとしない。

「サスケ?どうしたの?」

「ああそうかサスケ君は、、」

マリは笑いながらサスケを見た。

「サスケ?、、、、」

「すつすいません」

マリにやっと言えた一言だった。

あいかわらずブルブルふるえていた。

「麻美をよろしくね」

「りょ了解です、、」

「じゃママ帰るからね」

「うんありがとう」

次の瞬間もうママはいなかった。

「よくこんなしゃれた魔法の使い方をするなあママは、学生証はここにあるのに、」

「えっ？」

サスケは顔を悪くしてこっちを向いて言った。

「ママは忘れ物を持ってくるふりをしたのよサスケに会いにね」

「・・・」

サスケは何も言わなかった。

「ママは何をたくらんでいるの??」

ようこそ魔法の世界へ

「時間、、、」

サスケが言った。

「そうだね。ゴメン時間とっちゃって、」

「いいよ。別に、」

そう言うとサスケは黙ったままスルスルとマンホールの中へ入っていった。

麻美もサスケに続く。

カンカン、、

粗末な階段を真っ黒な底を見ながらゆっくりと下りていく。

トトン、、

底に着くと水の流れる音がしたと同時に鼻を刺すような臭いが襲う。麻美はとっさに鼻をつまんだ。

「クサッ!」

サスケは何も気にせず、つぎはぎだらけのコートのポケットから小さなメモを取り出した。

メモと自分の腕時計とを見合わせながら「こっち、」と真っ暗な方を指さしていった。

サスケはやたら時間を気にしているようだ。

指をさしたほうに歩いて行くがずっと時計を見ている。

「それにしても臭いなあ。サスケは臭くないの？」

「臭くない、」

静かに言った。

「ふーん」鼻をつまみながら言う。

水の流れている溝のすぐそばを歩いていく。

溝にはジュースの空き缶やコンビニのビニール袋がちらばっていた。二人は、冷たいコンクリートの壁を手で触りながら果てしなく続く暗いトンネルを行った。

サスケのブーツが地面にあたるたびにコンコンと辺りに鳴り響いた。

「ここ、」

まだ、続くはずのトンネルの途中サスケはパントマイムをするかのようにな手て何かを触っている。四角い扉のような、

「開けて」サスケが麻美に言った。

「どうやって開けるの？」

「手で押して、開くから」

「うん」

麻美はサスケの言うように 扉 のようなものを軽く押した。

すると、触っている壁がフウツと消えまばゆい光が目を覆った。

「まぶしい！」

とつさに目を手で押さえた。

ふいに後ろを向くとトンネルは跡形も無く消えていた。

「じゃあついてきて」

サスケはいつの間にか麻美の前を歩いていた。

「いつの間に、」

足元を見ると赤、黄、青と色とりどりのお花畑の中にいた。

それは、カラリと朝の日差しとさわやかな空と風、どこまでも続く花畑だった。

しかし、このさわやかな空はどこまでも続かない。向こうのほうに小さく見えている闇色。

鈍色の空と空に大きな黒い建物が浮かんでいる。

「サスケ、あの向こうに浮かんでいる黒い建物はなに？」

「えっあああれかあれは、センネンロウゴク千年牢獄」

「千年牢獄？って何をするところ？」

「・・・」

サスケはそれ以上何も言わなかった。

どこまでも続くこの花畑を歩くこと15分

歩きながらサスケは、つぎはぎだらけのコートのポケットから小さな四角い箱を取り出した。

「マッチ？」

その通りだった。

スライド式の箱から赤いマッチ棒を数本の中から一本を取り出すとそのままスウとしゃがみ込んだ。

「どうしたの？」

心配そうに麻美はサスケの元へかけ寄る。

「まあみてて」

サスケはマッチ棒を箱の横でシュツとするとハアウと音を立てて赤い炎が立ち上った。

火が消えないように手を添える。

墨色の手袋の内側がボウと赤く染まった。

「マッチの火きれいだね」

中腰でマッチの火を見つめて言うとサスケもこっちを向いてにっこり微笑んだ。

再びマッチの火の方へ視線を移すと添えた手に力を込め始めた。

目を閉じるとマッチ棒は消えマッチの炎は大きくなった。

「すごい」

宙に浮いた炎はサスケの手の中で静止している。

サスケはその炎を花畑に静かに下ろすとその部分の草花は灰と化し

その代わりに草花で隠れていた大きな丸い鉄板が見えた。

「マンホールだ、」

サスケは静かに目を開けるとろうそくの火を消すように炎は消えた。

「今のは、なんて魔法？」

「炎上って言うてね、火を操る魔法さ」

「ふーん・・すごいねサスケは」

「何が？」

「自慢しないもん」

「何の自慢？」

「魔法の。」

「・・・」

「魔法に限らず人間界では、他人に無いものを自分が持っていたら大いに自慢するのよ

私もあなたのような力があつたらきつと自慢してしまうと思うわ」

麻美はわざとサスケと視線をはずして答えた。

「おもしろいね」

「????」

麻美はサスケのほうを見る。

「君たちの事さ、人間の自慢したがる、そんな感情は僕にはないからね」

サスケはにっこり笑った。

「そうかもね」

ふわりとあたたかい春の風が吹いた。

魔界の秘密と緑の少女（前書き）

今回は新しいキャラが登場します。

感想や意見アドバイスがあれば書いてほしいです。

楽しく書きました。

楽しく読んでやってください。

魔界の秘密と緑の少女

サスケは、茶色のマンホールのふたをガラリと開けた。

マンホールの中をサスケはのぞき込んでいる。
かなり真剣に……

麻美はそんなサスケの姿を見てまねした。

「深いの？」中の暗さで麻美は、言った。

「2メートルぐらいかな」

サスケはそう言いながらスルスルと階段を下りていく。

サスケに「やめよう」と言えずついて行くことになった。

しばらく歩くと水の流れる音が聞こえてきた。

悪臭はまったく無かったので麻美はちよっぴりほっとした。

下まで降りるとサスケはポケットからマッチを取り出して麻美に差し出した。

「これ、ありがとうマリ様によろしく言っというて」

麻美にマッチを渡した。

「何これ、ねえサスケ」

視線を変えると、

「おーい吉田どこ向いてんだ?! 先生の話きけよ〜」
甲高い声で叫ぶ声が教室中に響いた。

すると教室にいる麻美と同年代の生徒の視線が一斉に麻美を指した。

「スミマセン、、」

教科書を配っていた最中だったらしく先生は教科書の束を持っていた。

麻美は赤くほてった顔を教科書で隠した。

教科書は数学、英語の基本教科の他に魔学、魔学歴と書かれた教科書があった。

「私いつの間に教室に来たんだろう、、」

時計を見ると深夜の2時をまわっていた。

「でも、なんでか入学式に出た記憶がぼんやりあるんだよねえ。さつきまでサスケといたのは夢だったのかなあ」

そう思いながらポケットに手を入れた。

「マッチ。これサスケがくれたやつ、、」

「あれっ？」

マッチのラベルを見ると見覚えのある柄が書いてあるのに気がついた。

マッチ箱の色は赤、

見覚えのある柄、、

「もしかして・・・」

あのと看、サスケがこの見覚えの無いマッチを麻美に返した理由が分かった。

「まさか・・・」

自分の推理を証明する為に机の横にかけてあるバッグに手を入れた。

「やっぱりね。水筒がないわ」

いつかママに聞いた事がある。

ある物 A をまったく違うある物 B に変えるまたはべつの術に変える
特殊魔法

その名を「変換」サスケはこの魔法が使えるんだ。

事実、マリはサスケが「変換」を使える事を知っていたのだ。

あらかじめ 2 人は連絡を取り合いマリは「変換」を使うときは麻美
に持たせた赤い水筒を

使うように命じていたのだった。

「で、ママはサスケに何らかの目的で絶対「変換」を使わせたかつ
たのね

ママはサスケに「変換」を使わせる為に入学式の時間をわざと遅ら
せてサスケと私に伝えた

本当の式の時間が分かったときにはもう始まっていた。

だから、サスケは「変換」を使って「炎上」を演術し 1 時間巻き戻
った世界にマンホール

を通してきてしまったのね」

「そういえばいつか本で見た事がある・・・

何に「変換」するかで能力の大小が決まるって・・・

「変換」は能力の大小を見るために病院や試験で幅広く使われている
魔法だって・・・」

「もし、それが本当ならばママはサスケの能力の大きさ、つまり強
さが見たかった・・・

そついうことになる、

でも能力の大小を決める基準が分からない。」

頭を抱えて考え込んでいると麻美の後ろの席の少女が声をかけてき
た。

「こんにちわ、私ナギって言うの、あなたは麻美さんでしょ？よろしくね」

麻美は「はっ」とわれにかえると

「こちらこそ、よろしくね」

そう言った。

いつの間にかチャイムは鳴ったらしく教室はにぎやかになっていた。

「そういえば、よく私の名前分かったね・・・なんで？」

初対面なのに麻美の名前を知っていたナギに疑問を抱いた。

「えっ?!しってますよこっちの世界じゃ有名ですもん

もちろんあなたのお母さん、マリさんですけどね」

「ママってこっちの世界でそんなに有名人なの？」

「有名も有名マリさんを知らない人はいないですからね!マリさんに憧れてこの学校に入学する生徒も実際多いんですよ」

「ママってそんなにすごい人だったんだ・・・」

「そういえば入学式から麻美さん「ボー」っとしていたみたいだったけど大丈夫ですか？」

「えっああ大丈夫。少し眠いだけ
あくびが出た。」

「麻美さんって人間界から来たんでしょ?どうやってここまで来たんですか?」

「さっええつとああ・・・」

ひとまずこの場ではサスケの名前はふせよつと思った。
また、話がややこしくなるから。

「とっ友達と来た。」

「そうなんだ。」

「うんそうアハハハ」

これが終わったら図書館に行こう「変換」に関するあの時読んだ本
を見つけに行こう。
そう思った。

その後の授業は終わり放課後になると教室は死んだように静まり返
った。

「私も帰えろつと」

ナギはスクールバッグを肩にかけながら言う。

「ねえ麻美さんも一緒に帰らない？」

下を向いていた麻美の顔をのぞき込むようにして尋ねた。

「ゴメン、私寄り道するから」

「そっか、じゃまた今度ね。」

「うんゴメンねバイバイ」

「バイバイ」

ナギがそう言うときスタスタと教室を出て行った。

「私も帰えろつと。ここから一番近い図書館は・・・ハリー図書館ね」

メモを見ながら言う。

木製の階段をギシギシ言わせながらおりて校門前まで来ると段差があるのに気がつかず

転んでしまった。

「痛っつー!!」

転んだ拍子にひざをすりむいてしまった。

「つつつつー!!」

足を押さえしやがみ込んだ。

きりきりと痛む

すると後ろからきれいな声が響いた。

「大丈夫? ケガ」

振り向くとそこには緑色の髪をおさげにくくり妖精のような服を着た女の子が立っていた。

「ええっああ大丈夫、大丈夫!! すりむいただけだから」

女の子は麻美の声を無視してケガしたところをまじまじとみつめていた。

「私 ^{リョク} 緑^{リョク} って言うの。あなたは?」

緑と名乗る女の子は麻美がすりむいたところを手で優しくなぞった。

「大丈夫! これくらいなら治せる」

すると、なぞったところが一瞬緑色に光った。

「はい! 治ったよ」

緑はにつこり笑うと麻美はポカンとしたまま傷口に目をやった。

「治ってる。。すごい！」

何もなかったかのように傷口は完治していた。

「ありがとう、でも傷や病気を治したりする魔法は禁止魔法で使えないはずじゃ・・」

「これくらい大丈夫よ」

「そっか、ありがとう、私麻美よろしく」

お礼を言うと緑ははにかんだ笑顔を見せた。

「なにかお礼がしたいなあ。。ねえ緑、私に出来る事ない？」
すりむいたところをポンポンとたたきながら言った。

「私、人探しているんだけど・・」

「誰？名前分かる？」

「サスケって言うの。ずっと探してるんだけど見つからなくて・・
知らない？」

「サスケ・・」

麻美はこれからサスケのことで図書館へ行く。調べ物は一人でしたがる性格だったので話がややこしくなるかもしれないかもしれないとためらった。

「知らない」

結果、嘘をついてしまった。

「そう？」

緑は麻美の目の前で手をかざすと瞬時にこう言った。

「あなたはサスケを知っているわね？」

「え?!」

「私を甘く見ないほうがいいと思うよ」

「どう言う事?」

「あら、もう気づいているはずなのに」

「??」

「心読んじやったのに、」

「ああそれで、」

「ねっ知っているんでしょう?サスケの事?」

「ええまあ、学校に来る時案内役として私と一緒に来たよ」

「そう、じゃあ実験は終わったんだ・・・」

「実験?」

「えっああこつちの話、なんでもない。それより麻美ってこれからサスケの事で図書館に行くのね」

「えっなんで?」

「私「読心」が使えるの。ゴメンね勝手に・・・」

「読心って心を読むって言う魔法のこと?」

「そうよ」

「緑も魔術師なの？」

「そうよ、私も図書館行っていい？色々聞きたいしさ」

麻美はサスケの事やこの世界のことを色々教えてもらおうと思い緑に Kを出した。

「ありがとう」

緑が言うと若葉色のきれいな葉っぱが舞った。

魔術師メイリンとカラーボトル

「私、この世界の事良く知らないんだ。緑ちゃん色々教えてね」

「いいよ」

校門を出ると歩きながら緑はこの世界の事を話し始めた。

「かつてこの国はひとつだった。かつて2つの国に境界はなかった」

「それはどういうこと??」

麻美が尋ねる。

「伝説の魔術師メイリンの命ゼリフよ

この魔法界には白界と黒界の2つが入り混じった世界でね。でも、かつてはこの国に境界はなく仲良い世界だったの。」

「きっかけは??・境界が2つになったきっかけは?」

麻美が聞いた。

すると、しばらく間をおいてから緑がしゃべり始めた。

「カラーボトルよ」

「カラーボトル??何?それ」

「この世界に1つだけあるどんな願いをも叶えてしまう魔法のボトル」

「魔法のボトル・・・」

「私もおばあちゃんから聞いて知ってるんだけど

そのカラーボトルの中には大きな赤い金魚が入ってるんだって。

」

「金魚？」

「そう、当時この世界でけんかになったもとはそのカラーボトルなの」

「願いを叶えてもらおうとしたの？」

「いいえ。目的は中に入っている金魚よ。」

この金魚のウロコを煎じて飲むと不老不死の体が入ると言われているらしいわ」

「不老不死・・・」

「で、カラーボトルをめぐって戦争が始まった。

そして今も。。」

「そっか、ここに来たとき見たあの灰色の空があつたのは黒界だったのね。」

「多分そっね。今いる白界は1年中春の天気と青い空が広がっているけど

黒界は1年中寒くて真っ暗な世界だからね」

「そっか、だからサスケはコートを着ていたんだ。」

そう、話し合っている間にハリー図書館に着いた。

ゴシック様式のレンガ造りの建物でかなり古そうだ。

真つ白のきれいな階段を上っていくと玄関先に「ようこそ」と書かれたプレートが置いてあった。

中に入ると天井近くまで本が揃えてあり本棚のいたるところに脚立が寄せてあった。

「大きな図書館だね」

麻美が言つと重なるように緑が言つた。

「私立図書館だからね。私も初めて来たわ」
あまりの大きさにアゼンと立ち尽くす2人。

麻美の肩にかけたバッグがぶり落ちると2人ともスイッチが入つたように中に入る。

「いつ行こうか・・・」

緑が言つた。

「それより麻美はサスケの何を調べようとしているの?」
緑が聞く。

「サスケの能力の大きさが知りたいの」
耳元で小声で言つた。

「能力の大きさ?」

緑が麻美を見て聞きなおした。

「ええ、魔力の大きさを調べるには魔術を使うことが最もとされていることは知っているよね？」

「変換でしょ？」

「そう、あの時サスケは私の赤い水筒を使って演術したの」

「何に？」

「マツチよ」

麻美は緑にこの世界に来たときの事、マンホールに入ったときの事、サスケがマリーに怯えていたことなど全て話した。

「そんな事があつたんだ、」

2人は変換について調べる事にした。

背丈の3倍ほどある大きな本棚にもたれてぶ厚いホコリだらけの本を開いて「変換」について

調べていると小さなかすれ声で緑が言った。

「あつた！これじゃない？」「変換」の演術条件って書いてある！
！」

「どれどれ・・・」

麻美は横から盗み見すると緑は麻美を気遣い小さな声で本を読み始めた。

マリのたくらみと呪術実験

「変換とはあるものをまったく違う別のものに変える術である。しかし、魔力が高い場合あるものを広大な魔法エネルギーに変えることが出来るが

基本的に魔法エネルギーに変えられる魔力を持つものは『黒魔術師』のみである。

変換について書かれているのはここで途絶えているわ」
緑は本をパタンと閉じてからそう言った。

「私がこの花畑にいる時も入学式が始まっていた。
もう、時間がなかったんだわ……」

「何を言いたいの？」

緑は不思議そうに麻美に問う。

「私なら変換を使って学校までレポート（瞬間移動）をつかうわ、
だって入学式に

間に合わないかもしれないんだもの。

「だけど、サスケはその力を使わなかった……なぜだか分かる？
」

しばらく沈黙が続いた。

そして、緑が言った。

「サスケは黒魔術師だから「変換」を使って魔法エネルギーに変えられたはず……
だけどそれをしなかった……レポートするだけの魔力がなかったって事？」

「そう、黒魔術師なのに魔力が小さいだなんて普通じゃ考えられない事なんでしょ？」

「確かに。黒魔術師はもともと私たち白魔術師と違ってケタ違いの魔力の持ち主よ。」

「テレポートぐらい朝飯前のはず。。なのにサスケは・・・」

「誰かに魔力を吸い取られた。。って考えにたどり着く結果になるね」

麻美が言う。

「そうとしか考えられないね」

「少なからずママはもうこの事を知っていると思う。。」

「えっ！？だったらサスケが危ないわ！！」

「どう言う事？」

言いながら図書館を飛び出した。

「ねえ！どうしたの？こんなに急いで。。」

麻美はかかとを踏んだ革靴を履きなおしながら言う。

「サスケはずっと前から実験材料としてさまざまな実験が行われているの」

「実験？・・・」

「麻美のお母さんつまりマリをリーダーとする実験グループは黒魔術師の広大な魔力

の実験と研究から始めたらいいわ。その実験台として使われているのがサスケなの

・・・そして今は『呪術』と呼ばれる呪いをかける実験が施されていると聞いたわ。」

「呪術って。じゃあその呪術って魔力を制限する呪いつて事？だからサスケの魔力が弱かったの？・・・」

「そうだと思う、麻美をここに案内させることを口実にしてマリの本当の目的は「本当に呪術実験は成功に至ったのか」それが知りたかったんだと思う。だから変換を使わせるように仕向けたんだと思う」

「じゃあなんでサスケが危ないの？」
麻美が聞く。

「呪術実験が成功したんだよ？！サスケにまた術がかけられてもおかしくないじゃない！！」

「そっか・・・じゃあ花畑にいる時なんで「炎上」を使っただの？？」

「あの花畑の下にはテレポートマンホールと呼ばれる、時空と空間の捻じ曲がった不思議な
マンホールがあるのよ、そして魔法のテレポートと同じ効果があるの。」

おそらくサスケはそのマンホールの事を知っていたのよ」

「サスケはどこに？今どこに居るか分かる??」

「えっサスケ??」

「うん、ママの変わりに謝りたい。黒でも白でも私には関係ないよ」

「多分、千年牢獄の下の研究所にいると思う。」

「そこに行こう!!」

「うん!」

2人は南の方角にある灰色の空をめざして歩き始めた。
しばらく行くと黄色と緑でふちどられた大きな草原が見えてきた。

謎鳥、アーサー登場

「きれいな所だね。」

麻美は緑の草原を指差しながら言った。

「あれ、私の家なんだよ。」

緑は楽しそうに言った。

「えっ?! あれ緑の家?？」

「うん、あつそうだ!! 黒界に行くまでに私の家によって行けばいいよ。」

「だいたい、研究所にどうやって行くか知らないしさ。」

「えっ?!? 知らないの?」

「えっああまあ・・・あつでも私友達に聞いてみるよ多分知っていると思うから・・・」

「分かった、ありがとう!! じゃあお邪魔させてもらいます!!」

シャツ、シャツ、シャツと乾いた草原を踏んで森の奥へと進んで行く・・・

桜の木のアーチをくぐると一軒の小さな家が見えてきた。

「まあ、ここの森は私の森なんだけどあれは本家つてところかな」

「へえ。。かわいい家だね」

「ありがとう！」

深い深い緑の草原と周りを取り囲む森林のちょうど真ん中にある緑の家。

木製で屋根にコケや花が咲いている。

だいぶ昔からあるように思えた。。

家の周りには、小さな小川が流れていた。

種を播いたばかりのプランターが5つ。 かわいらしいレイアウトに麻美はため息をついた

「かわいいねえ、絵本に出てくる家みたい！！」

その隣で緑は麻美とは別の方向を見つめていた。

「なにこれ・・・」

その声は低く悲しくもあり怒っているようにも聞こえた。

「どうしたの??」

慌てて麻美が緑の方に目をやると緑の草原が枯れている部分があるのに気がついた。

「どうして、」

緑は枯れている草に近寄り一本一本を優しくなでた。

「うん?これって。」

枯れた草の部分はまるで何物かが緑の家に行くまでの道のりのようだった。

「緑、緑の家の中に何かいらっしやるんじゃない!?」
なぜか敬語である・・・

「えっ！？本当に！！」

緑は泣きそうな顔で麻美を見た。

「多分、でも、私ら女の子だよ？？危ないから警察呼ばうよ」

「フフフ・・・」

緑は涙をふき取ると微笑を浮かべた。

「危なくないよ、私魔術師だもん」

「えっ、でも・・・」

緑はスウと手を伸ばした。

「私はねえ、この森の化身だとも町で呼ばれているの。自分で言う事じゃないんだけどね」

伸ばした手からは複数の緑の葉が紙ふぶきのように舞い落ちた。

その1枚を麻美が取って見ると本物だという事が分かった。

「この力があれば安心でしょ！？」

「だねっ！！」

「中、入ろうか・・・」

「うん。」

ガチャリとドアノブを回して奥に入る。

「お邪魔しまーす、」

少し小声で・・・

玄関先のマットの上に乗るとぺチャツといやな音がした。

「何??」

まだ扉の外に居る緑が一時停止した麻美の体に言った。

「何か踏んだ、」

麻美は首だけを緑に向けて言う。

「何って、」

緑は麻美の足元を麻美の代わりに見た。

「うゝううつ」

緑はとつさに目を手で覆った。

「えっ?何何何!!!」

慌てる麻美。

「血だわ・・・」

「ちつちつ血いゝゝ!!!?」

スポンジのようなマットなので踏んだ分その血が床に流れた。

「なんで??血が??」

麻美はマットから降りながらそう言った

「見て。．．この血2階に続いている．．」

見るとマットの血は2階に続く階段に続いていた。

「じゃまだ2階にいるとか．．」

「可能性大ね」

2人は階段を上り始めた。

緑は、ゴクリと唾を飲みながら1つまた1つ階段を上っていく。

麻美は緑の後ろに隠れながら歩く。

上になると突き当たりに1つ部屋があった。

血はそちらにつながっている．．。

「行くよ．．。」

緑は、手に汗を握りながら部屋の引き戸をガラツと引いた。
少し引いて中の様子を伺う．．。

「どう??何か見える??」

麻美は扉から少し離れて尋ねる。

「大丈夫みただけどこ私の部屋なんだよね．．．．あつで
も血は奥の寝室

につながっているわ．．。」

緑は引き戸を全開にして中に入り寝室へと向かう。

「えゝゝ!!入るの?!つもう」

麻美も文句を言いながら中に入る。

「うっよ．．。」

緑は寝室のカーテンに手をやった。

「ここに居るのは誰つつつ!!?」

ジャー!!

大きな音を立ててカーテンが開く。

眩しい光が寝室を明るく照らす。。

「ああつつ!!アーサーじゃない!!どうしたのよ!!」
どうやら緑が知っている相手のようだった。

ベッドの上は血だらけで白いベッドシートも真っ赤に染まっていた。
ところどころポタポタと血がしたたりおちる。

その血の落ちる中に大きな鳥が1羽倒れこんでいた。。。

その姿は人形のようにぐったりしていて息をきらしながら血で染ま
った赤い翼をバサバサ

動かしていたがそれは力なくかなり弱っていた。

血がでているもとを見してみるとお腹に大きな杭のようなものが刺
さっている

しかもベッドに貫通しているようでその鳥は串刺し状態。

「痛いんだ・・・それで暴れて・・・」

麻美が言う。

「アーサー!アーサー!!」

緑は気が動転している。

緑の呼びかけにもまったく答えず翼をはためかせそのつど赤い血を
流していた。

「そうだ！！治さなきゃ！！！」

緑は思い立ったように言うと、窓際にあつた植木の葉っぱをブツリと取った。

その葉をギュツと手で握ると目をつぶった。

「緑・・・。」

その姿は真剣だった。

緑の光が手からあふれるとスイと目を開けた。

「さっ麻美！！これ《薬》塗って！ 血止めだから。」

「うん！任せて！」

杭の刺さった周りに薬を塗るとアーサーはおとなしくなった。

「クウウウツツ・・・。」

「おとなしくなったよ！！血止まったし！！！」

「良かった。。。」

緑はそう言うと胸に手を当てて目をつぶるとさっきよりも眩しい光があふれた。

胸から離れた手には緑色に輝く小さな石があつた。

「何？それ。。。」

麻美が聞いた

「魔法石よ。魔法使いなら誰もが1つ持っているわ。麻美も魔術試験に合格すればもらえるわ」

「へええ〜で緑はそれで何をするの??」

「アーサーの傷を治すのよ」

「えっでも、私の擦り傷を治してくれた時はそんなの出さなかったじゃない!？」

「そうね。麻美の傷はそんなにたいした事なかったわ。私の力《能力》で治せたわ。」

でもアーサーのこの傷を治すには傷が大き過ぎて私の力ではどうにも治せないの」

「じゃ。。禁止魔法って事??」

「見つければ殺されちゃうほどの禁止魔法ね・・でも今はそんなの関係ない！」

アーサーを助けたいの!!」

緑は魔法石をアーサーの前でかざして呪文を唱え始めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

すると、パーーンとガラスの割れるような音を立てて魔法石が少しかけた。

同時に緑はバタリと倒れ気を失った。

「緑!!緑!!緑!!緑!!」
肩をたたくが様子は変わらない・・・。

（心を操るマインドコントロール）

ふと、隣のベッドに目をやるとアーサーの姿は見る見る鳥の姿から人間の男の子の姿に変わった。

刺さった杭も無くなり表情も柔らかくなっていった。

「禁止魔法を使うと石が少しずつ無くなるんだ。・・・」

「うつうつ・・・どこだ??ここ?」

「アーサーさん??」

「えっ?なんで俺の名前知ってんの?」

「いやっそれは。」

「あっ!!!!緑じゃん!おい!大丈夫か!!!?」

アーサーは倒れてピクリともしない緑にかけよった。

「さては、おまえがやったのか??」

アーサーの目はつりあがり赤い髪を逆立ててこっちをにらみつけている。

「ちっ違います!!!!緑があなたの傷を魔石で治して、」

「それは、本当か?!」

「嘘はつかないよ」

その後、二階に緑を寝かした。

「どうだ、緑の様子は??」

「大丈夫みたい、アーサーから貰った薬がよく効いている」

「そっか。さっきは悪かったな、疑ってしまつて・・・」

「いいよ、いいよ分かつてもらえれば。」

「ありがとう」

「それにしても、アーサーの傷見事に完治してるね」

「ああ、そうなんだよ。本来魔法で傷を治すのは最大の禁止魔法なんだよ・・・」

「しつているよな？」

「はい」

「でも、緑は自分の魔石を使ってまで俺の傷を治してくれた・・・
禁止魔法を使うと魔石がかけるのに・・・」

「じゃあ魔石がなくなったらどうなるの??」

「消えて無くなる。。消滅するんだ」

「消滅。。」

「ああでも大丈夫だよ・・かけたくらいだったら」

「うん、そう言えばアーサーも魔石持っているの??」

「ああ持っているよ。魔石は魔法使い、魔術師にとって命のようなものだからな」

「見せてください!!」

「いいよ」

アーサーは緑と同じように胸に手を当てて目と同じ呪文を唱えると手を胸から離れた。

赤い光がパアと光る。。

「これ、俺の魔石、」

「赤いんですね。とてもきれい」

「そうかな・・」

アーサーは照れた。。

「この魔石は無くなったたら消滅」死だからな心臓だと言ってもいいかな」

「大切なものなんですネ。とても」

「そう。だから魔石を使うと言うことは大変な事なんだ」

アーサーはそう言うと赤い魔石をスウと体に直した。
ガタツ・・

二階から大きな音がした。

「何??」

麻美はアーサーの後ろに隠れた・・・。

「ハアハア・・・アーサー大丈夫??」
緑だ。

「おい!!寝てないとダメじゃないか!!!!」

アーサーは立ち上がり緑のそばに駆け寄った。

「元気そうね、よかった・・・」

「ああ元気さ」

「アーサー・・・サスケが研究所につれてかれたの。!!」

「なんだって!!サスケが??」

「そうよ。また酷い実験を試されているんだわ」

「君の変わりに俺が行く、だから緑はゆっくりやすんで・・・」

「いやよ!!!」

「だってお前そんな体じゃ行けないだろう・・・!？」

「待つて。」

緑は目を閉じた。

「木の芽草の芽よ私に力を。」

そう言くと緑の表情は柔らかくなった。

「行くよ!! 私はもう大丈夫!!」

「何が起こったの??」

麻美が聞く。

「治癒だよ」

「治癒??? って傷を治す魔法なんじゃ・・・」

「血が出ていれば私には治せる範囲が決まられたくると血が出てない場合はほとんど

私の能力で治せるわ、」

「治せる範囲って???」

「例えばさっきのアーサーの血、あれは、血の出た範囲が20×20、40cmを超えてしまうと私には治せなくなるの。」

「そうなんだ。。だからアーサーの傷、治せなかったんだ・・・」

「うん」

「そんなことよりサスケのところに急ごうよ!」アーサーが言った。

「そうね」

3人は外へ飛び出した。。

「そう言えばアーサーはなんで私の家で倒れていたの?」

「ああ。。戦争さ」

「戦争?・・・まさか・・・」

「戦争?って何?何のこと?」

麻美が聞く。。

「私、麻美に話したことあるわよね?白界と黒界が戦争してて境界が出来たって・・・」

「うん」

「それ、今も続いているのよ・・・」

「戦争が??」

「そうよ、それに昔の戦争と違って科学と色々な技術が進歩しているからね。」

昔より派手なんだよね。」

「実は俺も戦地へ行ってきたばかりなんだ・・だけど大きな杭の雨が降ってきて、気がついた時には緑の家の中に居たんだ。」

「だからあんな血を??」

「今はね色々な技術が発達した白界は黒界を押さえつけようとして昔捕らえた黒魔術師を実験材料として研究、実験がされているのよ。」

「どんな実験??」

「簡単に言えば一人の魔術師の自我を破壊してあらゆる記憶と人格を思いのまま操る

心マインドコントロールを操る魔法 心呪術と言う呪いをかけるものよ。

この実験を成功させるために黒魔術師を使って実験がされているってわけ・・・」

「・・・それをサスケが。」

「ええ、マインドコントロールの他にも色々だね」

「そうだったんだ、」

「サスケは黒魔術師だったの・・知っているわよね??」

「うん」

静かにうなづく

「今から6年前、ある日俺たちは戦争に狩り出されたんだ。」

「私、10歳、アーサー10歳だった。」

「小さい頃から黒魔術師は敵だと思っていた。学校でそう習ったからだ。」

「だけど、奴は違っていた。」

「サスケの事ね？」

「そう、そして、私たちは10歳で戦争に狩り出された後辛い練習の日に反抗して牢屋に閉じ込められたの。」

「食事も水も出ない地獄のような毎日が続いたわ、もうダメかと覚悟を決めた時だった」

「「おい大丈夫か？」って小さな声が聞こえたんだ。それがサスケだった」

「サスケは小さなクッキー3枚と赤いりんご1つを差し出してくれた。」

「私たちは夢中で食べたわ。サスケが黒だと言う事も忘れてね。食べ終わってから」

「気づいたんだけどサスケも首と手首に鋼の鎖を携えていたの、サスケも捕まっていたのね」

「その後もサスケは色々持ってきてくれた。」

そして次第に俺たちはサスケについていこう黒魔術師は敵じゃないと思った。」

「だから、私たちはサスケを助けに行くの！」

緑は真剣な顔で言った。

「俺も同じだ」

「私も行くわ、ゝ！」麻美が言う。

「おう！じゃあ行くか！！」

アーサーは呪文を唱え始めた。

「アーサー？」麻美が言う。

「まあ見てなさいよ」緑は腕を組みながら麻美に言う。

すると、アーサーの体がムクムクと大きくなり麻美の体長の3倍はある大きな青色の鳥に姿を変えた。

「ピィィィー」

アーサーが叫ぶ。

「なんて言ってるの？」

「乗れって言ってるのよ」緑が言う。

「分かった」

麻美はアーサーの大きな翼を手でつかむと勢いをつけて飛び乗った。

「ピピイイー」

アーサーは翼をはためかせた。

「今なんて言ったの??」

「行くよつて、」

アーサーの体が斜めに傾くと背中に乗った2人は振り落とされそうになった。

「おっ落ちる!!!」

「大丈夫よ!!!しっかり羽につかまって!!!」
緑が麻美の手を握って風の強い空を見る。

アーサーは一気に急上昇した。

「すごい、スピード!!!」

だんだん麻美たちのいた森が小さくなっていく。

「ピイイー」

「もう大丈夫だって!!!」 緑が言う。

「本当?」

目をつぶっていた麻美は目をあける。

「うわあああ、空広いねえ気持ちいい!!」

頬にあたる風がほんのり温かく眠気を誘う。

すると、だんだん空の色が重い灰色になってきた。

進入！黒の実験所

さっきのカラリと晴れた青い空とは大違いだ。

「もうすぐつくわ黒界にね。」緑じよくが言った。

「ねえ緑、」

「何？」

「あの空に浮かんでいる建物は千年牢獄なんでしょう？？」

「そうよ、サスケもあそこから来たの」

「サスケは、なぜ実験台に使われたの？？サスケの他にも牢獄のなかじゃ沢山いるんじゃないの？実験を直接行っているのはサスケだけなのはなんで？」

「能力の大きさよ、」

「能力の大きさ？？」

「ええサスケは私たちと同じ年齢に見えるけど本当は、400年前に生まれているの」

「どう言うこと？」

「時間が止まっているの」

「どうして・・・？」

「私にも良く分からないけどあの千年牢獄に入っていると自然に
時永止術ときえいじゆ

と言っ呪いがかけられるそうだわ」

「時永止術・・・」

「そもそも、なんでサスケが捕まって牢獄に400年も入れられて
いたかって言うと
能力（魔力）が他の黒魔術師と比べてとんでもなく強かったからな
の・・・

魔法戦争をしていた両国は最初は黒界が勝っていたの。だけど白界
が勝った。

それは、白界が戦っていた黒魔術師に「永眠」と言う眠らせる魔法
を使っただから勝てたらしいわ。

サスケも戦争に出ていたのね。2歳だっただけ聞いたわ。 力が強
かった事と親が居なかった
ことなんかがあって出されていたみたい・・・」

「2歳って・・・」麻美が言う。

「でね、サスケが捕まった後、サスケの能力の強さを知った研究員
はどんな強く厳しい実験にでもこいつなら耐えられるんじゃないか
？って思っただけらしいわ。

そして予想は的中、サスケはどんな実験でも耐えただけらしい。

今では、サスケは、マリの言いなりになっているの・・・何故が分か
らないけど。。

また、別の呪術をかけられたのかもしれない・・・」

「でも、黒界に行けば何か分かるかもしれないね！」

「そうだね!!」

「ピピピイイー」

「着いたわ」

アーサーは急降下をし始めた。
空に浮かんでいる建物が近く見えてきた。

アーサーの足がズシッと地面に着いたのを確認すると2人はアーサーから飛び降りた。

「やっとついたか。」アーサーは人間の姿に変わっていた。いつの間にか・・・

「ここが研究所、」

研究所は灰色と言うよりも黒に近い色の建物で気味が悪い。
研究所のすぐ上には黒色の大きな建物が浮かんでいる。

「あれが千年牢獄か・・・」

「そんな事より研究所入りましょ!! きっとサスケはあの中よ!!」
緑が研究所のドアノブに手を置いた。

「ガチャガチャ・・・」
ドアノブが空回りした。

「開かない。。鍵がかかっている・・・」

「じゃあ中に入れないじゃん」

麻美が言う。

「どこか開いているところがないか探してみよう!」

「そうね」

数分後、開いていた窓が見つかった。

ガラスが割れあちこちに破片が散らばっている。

「ケガしないように中に入ろう」

「わかったわ」

「オッケー!」

3人は少しずつ足をかけ中へ入った。

入った先はトイレだったらしくタイルの冷たい音がコツンとなった。

「ここ、トイレじゃん!!しかも、うえっ!女子トイレじゃー!!」

「しー!!アーサーちょっとうるさいよ!」

「そっだよ!静かにしなきゃ見つかったちゃうよ!」

「ごめん、」

トイレの戸を開けながら周りを確認する。

「誰もいないわ」緑が言う。

緑は一步步歩きトイレからでた。

2人も緑に続く。

ボタン!!!!!!!!!!!!

トイレの戸が大きな音をたてて閉まった。

「アーサー!!!!!!!!!! 静かに閉めてよ!!!!!!!!!!」

緑と麻美は口を揃えてアーサーに言った。

「すみません……!!」

アーサーは即謝った。

そんな事もあり3人は順調にまっすぐ伸びる長い廊下に行く。
すると一番奥の部屋がうつすら光っているのを発見した。

「ねえ、あの部屋ちよつと怪しくない？」先頭に立った緑が言う。

「確かに……」麻美が言う。

「ちよつとのぞいてみようぜい!!」アーサーは扉の近くに立つ。

2人もアーサーに続く。。

キイ……。少し戸を引くと広大な実験所が広がっていた。

「サスケは???！サスケいる???」

3人はしきりに首を動かしサスケを探した。

「あつ!!!居た!」アーサーが言う。

「声でかいよ!!!!!!」緑はアーサーを押し付けアーサーの指差す方に目をやった。

「ああつつ……。緑は声を詰まらせた。

サスケは天井につながる長い鎖を両手につながれ膝をつき見るからにぐったりしていた。

どうやら気を失っているようだ。

「サスケっ!」緑が小さな声で言った。

鎖でつながれたサスケの前には白衣を着た女性が1人サスケを見ていた。

「あつ!ママ!」麻美の母、マリであった。

マリの後ろには総勢20人ほどの白衣を着た研究員が立っていた。どの人の視線もサスケのほうに向いている。しかし、サスケはピクリとも動かない。

「実験は成功したのか?」研究員が言う。

「そのようです。」資料を持った女の研究員が言う。

「やっと、成功したのか。。これでまた新しい可能性が見開けてきたぞ・・・」

「そうですね。私たちが住みやすい世界にするには、黒魔術師を消・・・

そこにいるのは誰ですか！！！？」
マリが静かに言った。

「やばっ！見つかった！！」緑が言う

「どっどうする？！」アーサーが言う。

コツンコツンとヒールの音が聞こえる。その音は次第に大きくなってきた。

「もっもうだめっ！！！」麻美が思ったその時だった。

薄暗い光が3人を包んだ。

「何々！！！！？」

「ああっ！」緑は言った。

「どうしたの？？こんな時に！？」

「ねえ見て、アーサー、麻美・・・」

緑はさっきまで覗いていたすきまを指差した。

2人は緑の言うように隙間を覗いた。

「あっ！サスケっ」

3人は驚いた。。

マリがこっちに近づいてくる。

なんだろうと他の研究員もみんなこっちに気を取られている。

さっきまで気を失いぐったりしていたはず……

サスケは研究員とマリの目を盗んでいたのだ。

こっちを向いて鋼の鎖のついた重い手を気づかれないように少し上げて術をかけている。

サスケはこっちを見てニタリと笑うと、一瞬目が赤く光った。

3人を包む光も激しくなった。

「ここは……」

激しい光に包まれて思わず目をつむって開けた瞬間、そこは研究所の裏手にある森にいた。

「何だっただんだ??」アーサーがいう。

「まさか。サスケが?」麻美が言う。

「でも、サスケって瞬間移動使えないんじゃないんじや……」アーサーが言う。

「だけど見たでしょう?? サスケが術使っていたじゃない?！」

「だよな。テレポート瞬間移動は黒魔術師にしか使えない術だしな。
やっぱり、サスケが……??」

「でもさあマリは麻美の入学式の時サスケを試したんでしょう? も
うどうなっているの?」

ドッカーン!!!!!!

「何何何何!!!!」

研究所から大きな爆発音が聞こえた。

丁度サスケが居た部屋からだ。大きな煙が上がっている。

「ねえ! サスケになんかあったんじゃない?!」心配そうに緑が言
う。

「早く行こう!! 今なら煙に紛れて助けられるかもしれない!」ア
ーサーが言う。

「行こう!!」3人は立ち上がり研究所に向けて走り出した。

「ちょっと待って……」
背後からきれいな女性の声が聞こえた。

3人はびっくりして立ち止まり同時に振り返る。
そこには赤茶色の長いウェーブのかかった髪をなびかせ大きなイヤ
リングをしている

女性が立っている。

「黒の実験所に子供が入るなんて危ないと思わないの??」女が言った。

「あなたはもしかして……」緑が知っている人物のようだ。

マリア脱獄計画

「マリアさんですか??」緑が言った。

「マリアさん??って誰ですか?」麻美が言う・

「えゝ麻美マリアさん知らないの?」

「うん。。」

どうやらマリアはとても有名な人物らしい。

「そんなに有名なんだ。。」

麻美はマリアの方をチラリと見た。

「あなた、人間界の子ね?」マリアが言う。

「はい。。」

「魔法界の勉強は難しいけど頑張ってるね!」マリアはにっこり笑って言った。

「ありがとうございます!!」

麻美は顔を赤らめた。

マリアさんも黒の研究所へ??」緑が聞く。

「ええ、サスケがここに居るそうじゃない？だから一週間前からこの付近を探索していたの」

「一週間も前からですか・・・」アーサーが聞く。

「この実験室の状況と構造、警備員の数、調べる事は山ほどあるわ。」

「さすがですね！！マリアさん！！」麻美が言う。

「まあね、あんたたちと一緒に実験所行きたいと思ってさ・・・一週間前からここに来ることは知っていたし・・・」

「知っていたってどう言うことですか？？」麻美が聞く。

「マリアさんはね」「未来視」「って言う魔術が使えるのよ」

「未来視ですか。。どんな魔術なんですか？」

「読んで字のごとく未来の事つまりこれから起こることが見えるの」
マリアは鼻を高くしていった。

「マリアさんはこの魔術習得の為に何百年も前から練習されているの」

「何百年も前からってどう言うことですか？」

麻美が聞くとマリアは手首を見せた。

「なんですか。。これ・・」

「黒魔術師が千年牢獄に入っていた証拠なの。。」

マリアの手首にはM・Mと書かれた入れ墨と

良く分らないマークがあった、

「このマークどこかで見たとような・・」麻美が言う。

「サスケのコートの背中についているだろ？」アーサーが言った。

「あっそう言えば！！ってかマリアさんはなんでサスケを助けに来たんですか？」

「弟だから・・・・・」

マリアは静かに言った。

「弟?? 弟なんですか?! 初耳です!」緑が言う。

「本当なんすか?」アーサーが言う。

「本当よ。」「マリアが言う。」

「弟ってことはマリアさんも黒魔術師なんですか??」緑が言う。

「元黒魔術師ね」マリアは笑いながら言った。

「?????」3人は不思議に思った。

「あれは今から500年前の事・・幼い私は魔法戦争に巻き込まれ
当時完成した

この千年牢獄に入れられた。

そこは、光も無くまさに闇だった。

私が牢獄に入ってから少し経ってから幼い男の子が入れられたの。

それがサスケだった。

私とサスケはすぐに仲良くなって行動を共にするようになった。

当時私は4歳、サスケは2歳。

小さかったから姉と弟の關係に自然となっていた。。

サスケは私を本当の姉のように慕ってくれた。
私もサスケを本当の弟のようにかわいがった。

私たちが入ったばかりの牢獄には タイムストップ 時間停止装置がついていなかったから

私たち2人は闇の中で育った。

顔も見た事なかったけど私はサスケの優しい声を聞くと元気が出た。
闇の中だけでも私は幸せだった。

だけど事件が起きた。

私が18歳、サスケ16の時だった。

タイムストップ 時間停止装置が開発され千年牢獄に導入されたの。私たちの
人生の時間が止まった瞬間だったわ・・・。

それは黒魔術師を使った広大な実験をするため、死なないようにと
言う意味があつたらしい。

時間停止装置、それは時^{とき}永^{えい}止^し術^{じゆ}って言う呪いをかける装置の事でね
魔法使いの手で術をかけたら2年かかる魔術なの。

それが、何秒って言うスピードでかけるられるようになった・・・

私は冗談じゃ無い！って思ったわ。

そして、強くここから出たい！出ないと！って思った。

2人で・・

そして思いついた。

ここから出る方法・・・。

伝説の魔術師メイリンが成功させたとされている伝説の魔法

《未来視》《過去視》これを成功させて闇の中で有名になればここから出られる。

そう思ったの。

だけど成功条件はとても厳しかった。

私は毎日血のにじむような努力をした・・。

サスケも応援してくれたわ。

だけど成功の兆しはまったく見えなかった。

サスケも応援してくれていろんなことにつき合わせたからだったのかな

風邪を引いちゃってね。高熱だった・・40度を超えるほどのね。

不思議だった・・

サスケが風邪を引いてから私の目は今までと違うものが見えるようになったの

「未来視」の成功だった。

そして、私が「未来視」を成功させた事を大げさに言い散らかしている

予想どうり外に出れることが許された。

だけど想定外だった。

外に出られても私はちつとも嬉しくなかったから
サスケをおいてでの釈放。

「必ず戻ってくるからね・・・」
そう言ったけど2度とそこに帰ることはなかった・・・。

私が外に出てから知ったんだけど、あの後研究員はサスケの能力の
強さを知って

サスケを中心とする実験が行われたらしいわ。

何回も何万回も・・・、

私は未来視の出来る黒魔術師、
白界からは私を白界に入れたいと言ってきたわ。
もちろん私は嫌だった。

、
だけど私の言い分なんて無視して3日も続く大きな実験が行われた、

黒魔術師を白魔術師にする実験・
成功例が無かった実験だったからみんな心配そうだったけど見事に成功した。

だけど今は黒魔術師に戻りたいって言う本能みたいなのが出てくるようになって・・・
とても苦しい。

サスケにもこんなの味あわせたくないのッッ！」

3人は再び立ち上がった。

「行きましょ！！マリアさん！！」麻美が言う。

「そうね！」

4人は扉の前に立った。

黒の実験所の正面ゲートだ

中はすごい煙が立ち込めていた

ドンッッ！！！！

もうい扉をアーサーが足で蹴飛ばすと真っ黒い煙が一斉に外に飛び出した。

ゲホっ・・・

口に手を押さえ中に入っていく。5分ぐらい歩くとさっきの部屋が見えてきた。

さっきと違って戸が全開である。

研究員が逃げ出したんだろう・・・

「しめたッ！」

4人は煙をかき分けて中に入った。

中央部分までくるとなにより黒い服の形が見えてきた。

倒れて居る。

「サスケっっ!!」マリアは駆け寄る。
肩を揺するが応答は無い。

「サスケ!!!」

「大丈夫??」

後の3人も駆け寄った。

「とにかくここからでしょう!!」
アーサーは言った。

「まって・・・」

行こうとするみんなをマリアが止めた。

「なんすか？」

「このまま行くと別室に居る研究員に見つかってしまっわ」

「未来視ですか？」緑が言う。

「マリアさんの言うとおりにした方がいいでしょうけどだったらどうしろと言う」

「んですか？」麻美が言う。

「それは・・・」

そのときだった。

立ってられないほどの突風が吹いた。

「何??」

「ピイイー!!」

上を向くと部屋いっぱいには翼をはためかせた大きな鳥が居た。

青い鳥。

翼

鳥

「アーサー??」

「そっかこの窓をぶち破って外に逃げれば、なんとかなるんじゃない??!」緑が言う。

「それっ！ありかも！！」

「そうと決まればさっさと行きましょ！！」
マリアはサスケをおぶった。

3人はアーサーに飛び乗った。

「ピピイイーーー」

アーサーがばさりと翼を仰ぐと部屋全部の窓ガラスが割れた。

「今よ！！」緑がアーサーにエールを送る。。

「ピピイイ！！」

割れたガラスをくぐって外に飛んだ。

影が動く「影写」の術（前書き）

評価をお願いします。

アドバイスや意見、感想などなんでも書いてください。

影が動く「影写」の術

黒い空が明るくなってきた。
黒い空が小さくなってきた。

青、

大きな空

「サスケは??」麻美が言う。

アーサーの大きな背中の中マリアはサスケを見ていた。

「分からない。意識はないわ」
ウェーブのかかった長い髪を耳にかけながら言う。

大きな青い空

純白の雲に瑠璃色の青い空

いつの間にか白界に入っているようだ。

「アーサー！私の森に行つて!!」
向こうの方に緑の森が見えてきた。

「ぴぴいい」

森の真下まで来るとアーサーは地面に吹き飛ばしをかけた。
次第に地面が見えてきた。

アーサーの脚がズシッと地面に着くとみんなは一斉に飛び降りた。

「ピュイ」

皆が降りたのを確認するとアーサーは金色こんじきの光に包まれた。

一瞬だった。

次の瞬間はもう人間の姿に変わっていた。

アーサーは緑の家に向かう皆を追い越して玄関に向かった。

「オレ、玄関の戸開けるわ」

「ありがとう」

サスケを負ぶったマリアが言う。

玄関を開けてマリアの先に入っただのは緑と麻美だった。

「私ベッドの準備してくるねッ！」

緑が言う。

緑は2階の寝室に急ぐ。

「私はご飯の準備するっ！・・・アーサーも後で台所に来てね」

「おっおっ」

アーサーは玄関の戸が閉まらないように持ちながら返事した。

その間マリアは負ぶったサスケと中に入った。

玄関マットを踏んで2階へと続く階段を上って行く。

相変わらずサスケの意識は無い。

「ここに寝かせてください」

部屋に着いたマリアは緑の言うようにサスケを寝かした。

と同時にマリアは近くにあったイスに座り込む。

「疲れましたが、マリアさん・??」サスケに布団をかけながら聞く。

「まあね。1週間実験所に張り込んでいたからね、でもサスケに会えて本当に良かった。」

「そうですね、でも、意識が。。」

「そうなのよね」

小さな寝室のカーテンがヒラリとなびく、

3人の居る部屋をほんのちよつと涼しくした。

寝ているサスケのキャラメル色の髪がゆっくりなびく。

ドンドンドンドン……

下から誰かが上ってくる音が聞こえた。

その音はどんどん大きくなってくる。

寢室の扉が開くと、黄色い鍋の底に真っ黒になった物体が2人の目に飛び込んできた。

鍋のあとから2人の顔が……

「ゴメン緑・カレー作ろうと思ったんだけどさ、

アーサーがちゃんと火見てなくて、焦がしちゃった……」

「オレのせいだよッ！！あれはお前が悪いんだろうーがよ！」

「私はにんじん切っていたんだもん！！　アーサーが一番近くにいたのに

見てないから悪いんだよッ！！」

「いやいやいや・お前にも責任あるとおもっけどな！！」

「いいわよ鍋ぐらい！！」

緑が言う。

喧嘩けんかしていた2人は緑の声を聞いて泣いているマリアの方に

目をやった。

「サスケ、」
アーサーが言う。

「サスケ・・・」麻美はサスケに駆け寄る。

ベッドの近くに膝をつきサスケの手を握った。

「??????」

麻美は驚いた。

手

黒い手袋

握る

「冷たい」

麻美はとつさにサスケのおでこを触った。

「氷みたい、なんで?! サスケ・死んでいるの??」

「死んでいないわ」マリアが下を向きながら言う。

「じゃあどうして・・・?」

部屋の入り口に立っていたアーサーが麻美に近づく。
こげた黄色い鍋を窓辺のチェストに置いて。

「こっち来いよ」

アーサーは呆然とする麻美の手を引く。

寝ているサスケの布団をめくってコートの下を指指した。

「ここ」

「何?」

アーサーは麻美の手をサスケの胸の上に置いた。

「これで分かるだろう？」

「えっ?!」

麻美は最初はアーサーが何を言っているのか分からなかったが、すぐに分かった。

「音が・・・しない」

「呪術実験の時、心臓・抜かれている見たいなのよ、実験の副作用がでないようにって・・・ハハハ」

マリアが気力なさげな声で言った。

「これが呪術実験の力なのよ。身も心もサスケは・・・」

怒り狂った声で緑は泣きながら言った。

麻美も目に涙をためてサスケに布団をかぶせた。

うう・・・

「大丈夫だよ姉えさん・・・」

サスケはうつすら目を開け喋った。

「サスケッ！！大丈夫？？」

マリアがサスケの顔を覗きこむ。

同時に麻美とアーサー、緑が駆け寄る。

「暑い・・・もう大丈夫」

「本当によかった。」

「そんな事より姉えさん・・・外」

「ええ、来ているみたいね・・・あなたを狙っているの？？」

「多分ね」

そう言うときサスケは立ち上がり壁にかかった大きな包みを背中に背負って立ち上がった。

「サスケ？？どこ行くの？」

緑が聞く。

「大丈夫、すぐ片付けてくるから。」

目が焼けるから4分外見るのやめてもらえる？？」

「分かったわ。」

マリアが言うときカーテンと窓を閉めた。

「ありがとう」

そう言うときサスケは部屋を出て行った。

「なぜ、外を見ると目が焼けちゃうんですか??」

麻美が聞く。

「ここは白界。サスケのように魔力が広大で使える術も多彩ならば私たちの

身体に大きく影響を与えるものも無いわけではないのよ。

その身体に影響を与える魔術の事を【白界の禁止魔法】と呼ばれているの

今、サスケが使おうとしている魔術はまさに【白界の禁止魔法】なのよ」

ゴクリと唾を飲む。

「でもさ、見るなって言われると見なくなるよね」
緑がニヤリと笑った。

「それはそうだけど、私、目が焼けるのいやだな」
麻美が言う。

「そんなただの名神だよ、ちょっとならいいんじゃない??」

「ダメだよ!!」

「いいじゃん気になるじゃん!ねっマリアさん!」

「えっええっ!?!」

全員が賛成した。

カーテンのすきまからそーっと覗く。
眩しい光が見えた。

「目が焼けるっ！！！」

「オレに任して下さい！！」

アーサーは片手を外に向けてかざした。

「「^{バリアー}光壁」」

アーサーは目に入ってくる光を遮った。

「ありがとうアーサー」麻美を最初に緑、マリアがアーサーにお礼を言う。

「いや、これくらい何でも！」

アーサーは若干照れ気味だった。

「ねえみて。サスケだわ」

「光壁」の中から外を見るとサスケがなにやら追っ払っているように

術を使っているのが見えた。」

「サスケを迎えに来たんだわ」

「えっ?!」

空に浮かんでいるのはUF のような物体だった。
結構な数だ。

「迎えに来たって実験所からですか?」

「そうだと思う。」

しかし、外に居るサスケはいたって冷静だった。

その時、UF から赤色の光線^{ビーム}がサスケを直撃した。
サスケは、バタリと倒れる。

「サスケッッ!!!」麻美が叫ぶ。

「大丈夫よ。見てごらん」

麻美は鼻をすすりながら、外を覗くとサスケは目をちゃんと開けていた。

真剣そうだ。

時間がたつのを待っているかのように・・・。

「サスケ、何をしようとしているのかな?」

すると、今まで宙を舞っていたUF が地上に降りてきた。

サスケは、ピクリとも動かない。

半分以上宙に居るUF から太い鎖がサスケを巻きつけた。

「大丈夫じゃないじゃない?! サスケが連れて行かれようとしているんだよ?」

「サスケ〜〜!!」

皆、思いもよらぬ展開に呆然と空を見上げた。

鎖に縛られたサスケは、黒い空のかなたへと連れて行かれた。見えるサスケがだんだん小さくなっていく……。

「姉えさん」

「サスケ??」

マリアが呼ばれる声に振り向くと、かなたへと連れて行かれたはずのサスケがベッドに座っていた。

「何言っているんですかマリアさん!! サスケは空のかなたに連れて行かれたんですよ?」

現に今あそこにいるじゃないですか?! ってあれ……?」

「サスケが2人??」

全員が混乱した。

「あれほど見ないでよって言ったのに・・・。」

「サスケ??なんで2人?!」麻美が聞く。

「ああ。あれか・・・。」

サスケは不思議そうに空を見ながら言う麻美やアーサーを可笑しく思いながら言う。

「ほら、僕の足元」

サスケの言う通り皆はサスケの足元に目をやった。

カーテンの隙間から夕日の光がキラリと差し込んだ。

「眩しッ!」

麻美が言う。

サスケ以外の誰にも黒く細長い影ができた。
それは、常識。当然のことだ。

だが・・・

にやりと笑いながら立ち上がったサスケを見るとあるはずの影がなかった。

「「影写」^{えいしゃ}って言う魔術だね。本当に演術時に発生する光で目が焼けてしまう

魔法なんだ。

僕の方を見ている事に早く気づいて良かったよ」

「ごめんなさい・・・私も調子に乗って。」

マリアが謝る。

「オレも・・・」

「私も・・・」

「ごめんなさい」

「特に「影写」は魔界でも恐れられている3大魔法の一つだしね。」

「3大魔法って??」

「影を自分の分身にして動かす事のできる魔法【影写】

何かもの時間を瞬時に止められる呪い魔法【時永止術】ときえいしじゆつ

そのものの自我を破壊して心を意のままに操る呪い魔法【心術】マインドコントロール

この3つが魔界で禁止されている魔法なの」マリアが言う。

「でも、サスケは、さっき「影写」を使ったよね？それっていけない事なんじゃ・・・」

「大丈夫よ。魔界で・・・なんて言う大げさな名称が付いているけどこれは、全て白界

で禁止されている魔法だもの。

サスケは黒魔術師、影響あるのはむしろ私たちの方なんだから！」

「でも、今度から気をつけてくれよな。本当危ないんだからさ」

「うん」

「でもさ、「影写」ってなんで禁止魔法なんですか?? 私にはそうは思いませんが・・・」

緑がマリアに聞いた。

「影ってその物があるから出来る物でしょ? 影が無くなったら、その物は最初から無いって事になるじゃない? 結果、消えちゃうんだよね・・・」

「所要時間は1時間、それまでに自分の影を戻さないと消えてしまふんだ。」

当時はこの魔術を許可されていた時代もあったらしいが、所要時間を守る事が出来なかった人が多く、禁止されたんだ。」

アーサーが言う。

「へっ」

その時ガチャッと部屋の扉が大きく開いた。皆がそちらを見る。

「お帰り、ごくろうだったね」

サスケは静かに言う。

そこには真っ黒のサスケが立っていた。

「影だよ」

緑が言う。

黒いサスケはサスケの後ろにつくとさっきまで無かったサスケの影が出来た。

「さっ早くここから出よう、僕が影だったことをそろそろ気づかれているはずだ。」

君たちの命も危ない。

「そうね、行きましょー!!」マリアが言う。

「わかった!!」

「そうと決まれば急がなきゃ」

皆は、家中の必要だと思うものを集めに向かった。

空はすっかり深い深い藍色になっていた。

カラスは鳴くのを止め、金色の星と黄金色の月が辺りを明るく照らした頃だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1582e/>

魔法使いサスケと 空をおよぐ金魚

2010年10月9日01時33分発行